



黒部川電源開発と宇奈月温泉誕生に貢献した人

やま だ ゆたか
山田 胖 (1886～1964)

山田胖は、明治19年（1886）、福岡県に生まれた。明治43年（1910）に東京帝国大学工科大学土木工学科を卒業し、逓信省臨時発電水力測量局技師となった。その後山田は、石黒五十二（貴族院議員）の紹介で高峰讓吉と出会い、日米合弁のアルミニウム企業設立の計画を知った。これに深く共鳴した山田は、大正6年（1917）7月逓信省を依願免官し、東洋アルミニウム(株)創立事務取扱として同年11月初めに黒部にやってきた。そして、当時人跡未踏の秘境で、技術的にも開発が困難であった黒部川の電源開発の調査に没頭していった。

大正8年（1919）12月、東洋アルミニウム(株)が正式に設立され、大正9年（1920）4月から山田は水力部長を務めた。大正11年（1922）頃からの世界的経済不況や高峰讓吉の死去により、東洋アルミニウムの経営権は日本電力(株)に引き継がれた。大正12年（1923）2月、山田は日本電力(株)に移籍し、黒部川建設所所長として黒部川電源開発の陣頭指揮をとった。同年12月には、黒部川での本格的な電源開発の基になる電力を得るための弥太蔵発電所（1500kw）を完成させた。その電力は、黒部鉄道（現富山地方鉄道：三日市～宇奈月）に工事用電車を走らせ、柳河原発電所建設の動力源になった。また、大正13年（1914）6月頃には、黒部川での水力発電所立地調査の結果をまとめ、大小13か所の候補地と合計で28万1700kwの電力を生む可能性を示した。

宇奈月温泉の開発に対しては日本電力(株)は難色を示した。しかし、「今後長期にわたる困難な電源開発事業を遂行していくためには、桃原（現宇奈月）に職員を定住させる施設や多くの工事人夫を保養する施設が必要である」「黒部鉄道に、より多くの旅客を呼び込むためにも、桃原に新しく引湯して一大温泉地を拓くことが望ましい」と山田は強く主張し、宇奈月温泉開発の方針が決定された。

温泉開発が成功するためには、ひとえに常時熱い湯が引けるかどうかにかかっていた。山田は、大正10年（1921）の冬、愛本温泉に入っている2、3人の男たちの「黒雑の湯元で少し水を加えると、もう少し温かい湯が到着する」という意味の会話を耳にした。その会話が引湯管改良のヒントになり、泉源で水を加えれば流量と流速が増して、到着する湯温は今より高くなると考えた。大正11年（1922）2月に調査を実施し、口径4寸の管を使えば、黒雑から桃原に2時間15分で到達し、冬でも約55度の湯が確保できることが分かった。引湯管には保温に適した赤松をくり抜いた約2mの木管を使い、約3500本をつなぎ合わせて引湯工事は竣工した。大正12年（1923）11月末、黒雑で引湯管のバルブが開けられ、暫くして、桃原にある木管の先から熱い湯が湯気を立てて流れ出した。宇奈月温泉の誕生である。山田37歳の時であった。

山田は、昭和元年（1926）12月末日、日本電力(株)を辞任し、黒部川を離れた。山田が黒部川で活躍したのは、大正6年11月から昭和元年末までの9年2か月であった。その後、奥多摩工業(株)等数社の社長を務め、昭和30年代まで活躍した。昭和39年（1964）1月、惜しまれながら逝去。享年77歳であった。

〈専門員 根塚 昌志〉



※樺平付近で測量隊を指揮する山田胖
〔中央〕
大正9年

〈『黒部開発の恩人 山田胖翁の功績顕彰録』所収〉



※大正12年から昭和38年まで使用された引湯管
（現在は合成樹脂管を使用）

〈黒部市歴史民俗資料館所蔵〉